死者たちの宴

島田一男

徳間文庫

徳間文庫

死者たちの宴

© Kazuo Shimada 1991

Ⓛ-1-57

1991年1月15日 初刷

著者 島田一男

発行者 荒井修

東京都港区新橋四—一〇 〒一〇五

発行所 株式会社徳間書店

電話(〇三)三四三三・六二三一(大代)

振替 東京四—四四三九二番

印刷 凸版印刷株式会社

製本

〈編集担当 本間 肇〉

ISBN4-19-569247-4 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

江苏工业学院图书馆
藏书章

宴の者

島田一男

德間書店

目次

1 多摩川最上河畔荘事件 5
2 地獄へのパスポート 43
3 火焔地獄と血の池地獄 82
4 ある女の歪んだ道 121
5 貝になった女の群像 161
6 藪の中の男と女 200
7 三つの事件は一つ 239
8 崩れ落ちる女の砦 277
9 圭子の部屋は緑色 316
解説 山前 譲 346

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

1　多摩川最上河畔荘事件

絹糸のように細い雨が、シトシトと都立監察医務院の前庭を濡らしていた。
庭の片隅に建てられた御影石五輪型のチンマリとした慰霊塔も濡れて黒く光っている。
ただでさえ暗い感じの医務院の雰囲気が、こんな日は一段と落ち込んでしまう。
特に院内に満ちているクロロホルムの匂いが、普段より数倍強いように金田圭子には感じられた。
圭子は、女子医大で法医学を専攻、卒業してから三年、母校の法医学教室で助手を勤めた後、医務院の監察医に採用されて、足かけ三年になるのだ。
大学時代から今日まで十年余り、クロロホルムの匂いには馴れ切っている積りだが、こんな雨の日は我慢がならないほど、匂いが重たくのしかかって来る。
しかもその匂いは薬品だけではなく、多分に死臭が混っているような気がする。

それもその筈、医務院が年間に取り扱う不自然死死体の数は、大体五千七百体以上。一日平均十五、六体である。これは、東京二十三区内で発見されたものだけの数字なのだ。

しかも、検死の対象になった死体のうち、約三分の一は死因がはっきりせず、解剖してみなければならない。

一つの死体の解剖には、大体三時間は必要であろう。これを院長の腰越博士を含めて、八人の監察医が分担するのだから、かなりなハードワークである。

現に、解剖室の冷凍庫は、三段で八列、つまり二十四区に分けられているが、そこには未解剖の死体を納めた棺桶で、殆ど満杯の状態が続いている。

これでは圭子たらずとも、常に死臭を嗅いでいるような気がするのは当然であろう。

いつの頃からか、圭子は人間嫌いになっていた。自分の体にしみついた死臭が、相手を不快にするのではないかと気を遣うのが原因だった。

だから、外出する時には、必ず入浴してセッケンで体をゴシゴシ洗い、清潔な衣服を着るようにしている。

「そりゃア駄目だよ。その匂いは君の鼻についているのだから、他人さまには何も感じやしないよ」

いつか腰越院長がそういって答えたことがあるが、圭子はそれでも入浴と洗濯はやめられないし、香水を離すことは出来ない。

もう一つ悪いことに、圭子は住まいを間違えた。

「あなたお住まいはどちら？」
就職第一日、初出勤の挨拶をして廻ったとき、大学の大先輩で、監察医十余年の門前美津子から訊ねられた。
「世田谷の千歳烏山です」
「それは遠いわね。親御さん達とごいっしょなの？」
「いいえ、アパートの一人暮らしです」
「じゃ身軽ね。あたし達はいつ呼び出されるか判らないのよ。死体が発見されると、所轄署から医務院へ急報が入り、医務院から当番の監察医へ連絡があるの。するとすぐ現場へ駆けつけなければならないのよ。烏山といえば成城署管内だけど、あまり事件のないところね」
「はい、パトカーや救急車のサイレンはあまり聞きません」
「もう長く住んでいらっしゃるの？」
「前は大学に近い新宿区内のアパートだったのですけど、ちょっと嫌なことがあったのでいまのところへ移りました」
「嫌なことって？」
「痴漢のような人が住んでいたのです」
「変なことをされたの？」
「いいえ、あたしは下着を盗まれたくらいですけど、他の部屋を借りている女の子は、夜中にのぞかれたのです」

「その方の部屋は二階のはずれでしょう？」
圭子は驚いて門前美津子を見た。
「おっしゃる通りですわ。でも、どうして判るんですか？」
「のぞかれただけで済んだからよかったのよ。前に板橋の方で、乱暴された上絞殺された若い女性の死体を三度も検死したことがあるの。三人共、アパートの二階の一番端の部屋に住んでいたわ」
「偶然の一致ではないのですか？」
「違うわ。捕えられた犯人の自供では、二階の一番奥という安心感から、窓をあけ放したり、鍵をかけずに寝てしまう女の子が多いということなの」
「そういわれると、あたしも余り窓は気にしませんわ」
「やはり二階なの？」
「ええ、それも一番奥の部屋なんです」
「危ないのよ、そんなのが……。あたしがいいマンションを紹介するから引っ越しなさい」
「マンションなんて、駆け出し監察医の給料ではとても……」
「それが大丈夫なの。家賃はアパートなみ。何よりも交通の便に恵まれているのよ」
「いまのところでも、私鉄の駅は近いし、甲州街道沿いですからタクシーも比較的楽に拾えますわ」
「でも、事件現場が練馬区の旭町や足立区の鹿浜だったらどうします。東京都の南端から北

端まで飛ばしたらタクシー代も大変だし、国電はもとより私鉄も地下鉄もきかないのよ」

旭町や鹿浜という土地は、圭子には見たことも聞いたこともなかった。

「困りましたわ。あたくし、郷里の山形から出て来て十年余りですけど、東京には知らない町が沢山あるようですわね。これではタクシーを拾ってもとても行けませんわ」

「その点はご心配なく。医務院の車がお迎えに行きますから……」

結局圭子は美津子の強引な誘いを断り切れず、大塚四丁目二十一番地のマンションへ連れて行かれてしまった。それが失敗だった。

マンション望岳荘は2DKで、家賃は確かにアパート並み。ここの二階に住んでいるという美津子が圭子に世話をしたのは三階だったが、窓の外を見た圭子は驚いた。目の前に医務院の玉子色の壁が見える。

大塚四丁目二十一番地は、監察医務院の所在地でもあったのだ。

押しつけられるようにして借りた部屋だったが、とにかくもう三年も住んでいる。

家賃が安いのもさることながら、何しろ隣り組なのだから、これ以上近いところはないわけである。

解剖でどんなに遅くなっても、安心して一人で帰ることが出来るし、呼び出し電話が入ってから身仕度をして表へ出ると、待っていましたとばかり、黒塗りの大きなワゴン車が医務院から出て来る。

解放感はなかったが、便利だから圭子は望岳荘を離れることが出来なかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「あたしは、なぜ監察医なんかになってしまったのだろう……」
降りしきる小雨を窓越しに眺めながら、圭子の追想は続く。
女子高時代はもちろん、女子医大に入学した時点でも、法医学を専攻しようなどとは夢にも思っていなかった。
医大の同級生六十余人の中でも、監察医になったのは圭子一人である。
みんな内科、外科、神経科、眼科などへ進み、中には産婦人科医になって開業し、殆ど中絶手術専門で、ガッポリ稼いでいるものもあるという噂を耳にしている。
それなのになぜ苦労して圭子だけが監察医になったのか？　監察医になるには解剖資格認定委員会の選考に合格しなければならない。その選考を受ける資格は、医大を卒業し、医師の国家試験に合格したもので、二年間に二十体以上の死体解剖の経験を持っているものと決められている。
その死体解剖も、助手として手伝っただけでは駄目だ。十体以上は、責任者として自らメスを振るったものと規定されている。
こんなに苦労して医務院に採用されても監察医としては駆け出しだ。医務院の院長の下に副院長、部長、医長がおり、この四段階が警官の位にして警視格、監察医は医長の下で警部相当官といえよう。
現在の院長腰越博士などは解剖歴なんと三十七年というベテランである。副院長以下の先輩達は何れも十数年の経験を持ち、国公立、あるいは私立医大などの教授を兼務している。門前

美津子はまだ医務院勤務十年の先輩ではあるが、近く首都圏の県立医大に法医学教授として迎えられることになっている。

「この先十年も、あたし医務院に勤めることが出来るかしら……？」

圭子は時々そんな戸惑いに将来の見通しが暗くなることがある。

「こんなことになったのも、みんな小畑先生のせいだわ……」

圭子は女子医大当時の恩師小畑教授の笑顔を思い出す。

小畑高光博士といえば世界的な血液学者として、アメリカやドイツでも有名な法医学の大家であった。

この小畑教授の授業振りが楽しかった。

解剖台に死体を横たえた階段教室での授業ではあったが、少しも暗さがない。死体にメスを入れる手付きも飄々としているし、血液の分類も専門だけに興味深く、一本の毛髪がどれほど大きな意味を持つか、圭子はグングン小畑教授の話に引きずり込まれ、質問の回数も圭子が一番多かったようである。

「金田君だったね。なかなかいい質問をするなァ。君は法医に向いているようだ。血液学か、硬組織学からテーマを選び、博士論文を書いてみないかね。わたしが相談に乗ってあげてもいいよ」

圭子は嬉しかった。まだ卒論も書いていないし、国家試験の準備をしなければならなかったが、博士の肩書きは医学を志すものがみんな抱いているものなのだ。

圭子は小畑教授に頼んで解剖教室の助手にして貰った。
これがホルマリン漬け、死臭漬けになるキッカケだったのであるが、肝心の小畑教授は圭子が医大を卒業する直前に病死してしまった。
「あなたも随分物好きな人ねェ。医学は患者の病気を治し、人の命を助けるものでしょ。だけど同じ医学でも解剖は、死んだ人が対象なのよ。なぜ、いつ、何処で、どうして死んだかを調べあげても、死者は生き返らないわ」
圭子が医務院に入った第一日、先輩達へ挨拶廻りをした時、門前美津子が片頬に笑いを浮かべていった。
「先輩は、どうして監察医をしていらっしゃるのですか」
圭子は訊ね返した。
「理由は三つあるわ。第一は父が警視で、警視庁の検死官をしているの。中学時代から毎日のようにいろんな事件や死体の話を聞かされていたわ。その影響ね」
「では、お父さまと娘さんと、二代にわたって死体をいじっていらっしゃるのですか」
「あたしは、いじっている積りはないの。死人とお話している積りよ」
「それも監察医におなりになった理由の一つですか？」
「さあ、それは第三の理由に入るかもしれないわね」
「じゃ、第二の理由はどんなことですか」
「女子医大で法医の小畑って教授に誘惑されたのよ」

「小畑先生に誘惑？」
「カン違いしないでね。お色気抜きの誘惑なのよ。小畑教授の講義が面白くって、いつとはなしに法医にドップリ漬かっちゃったの」
「先輩もですか？」
　圭子は驚いて美津子を見上げた。
「じゃ、あなたも小畑教授の教え子なの？」
「はい、卒業間際に、先生が亡くなったときはショックでしたわ」
「では、教授のお葬式には？」
「勿論、参列しましたわ」
「あたしも行ったわ。もしかするとあたし達、顔を合わせていたのかも知れないわねェ」
「第三の理由を聞かせて頂けません？」
「さっきの、死人とお話をするのが楽しいってことに関係があるのよ。よく話を聞いてやると、不自然死の死因が判明するわね。それによって、殺人犯人と見られていた人物の潔白が証明される。それがとても楽しいのよ。ちょうど捜査官が真犯人を逮捕したときの喜びとは正反対の喜びね」
「失礼ですがご結婚は？」
　圭子の質問に、美津子がケラケラと笑った。
「結婚？　したいわねェ。だけど駄目なの」

「何故ですか」
「だって、女のあたしが、掃除洗濯、食事の仕度をしてくれるおかみさんを持つわけにはいかないでしょう」
「おかみさんをですかァ!!」
「忙しくって、こちらが女房役を欲しいというわけなのよ」
美津子の言葉が、身に浸みて圭子に判るのに、半年とはかからなかった。
この三年間、死体と取っ組んで、あっという間に月日が流れてしまった。結婚どころか真剣な恋さえ出来ない。
恋といえば、時々医務院へやって来る警視庁の捜査一課第二班長遠藤警部の顔を見るとなぜか心がときめく。
これが恋というものだろうか？　このホルマリンの匂いと死臭のしみついた体で恋なんて飛んでもない……。
圭子がそんなことを考えている時、突然スピーカーから、物静かな女性の声が流れ、圭子を現実の世界へ引き戻した――。
「ただいま、多摩川より遺体が二体到着しました……」
アナウンスは二度続けて繰り返された。それが医務院の玄関受付にいる渡辺多可子の癖だった。
多可子は美しく、普段は活発な少女だった。まだ成人式前である。

そんな少女が、医務院の事務室へ入ると、物静かで、淑やかな娘になってしまう。それも医務院が持っている一種異様な雰囲気のせいかもしれない。

「さ、ボチボチお客様の御到着よ。行きましょうか」

湿った雨空とは正反対に、門前美津子が元気よく立ち上った。

監察医室は四階にある。ここに五人の監察医が机を並べている。院長、副院長、部長はそれぞれ専用の事務室を持っている。

五人の監察医のうち、一人の男性上野太吉は医長だった。圭子より遥かに長い監察医歴の持ち主だが、まだ専用事務室は持たせてもらえない。

電話も共用だった。上野医長のデスクの上には電話が二台置いてあった。一つは黒色で普通の通話用のもの、もう一台は赤色で、警視庁の司令室専用の直通電話である。

変死体が発見されるとすぐこの電話が鳴る。誰かが連絡を受け、先ず三階の院長室へ報告をする。

その話が終る頃には当番の監察医が出動の準備を終り、いつでも飛び出せるようにして待っている。

準備といっても、気候に合せた服装の上から白衣を着て、カバンを持つだけだ。

カバンには、検死に必要なメス、ハサミ、メジャー、あるいはノコギリや虫メガネが入っている。

雨や雪の時にはゴム長をはくこともあるが、圭子も美津子もなるべくハイヒールははかない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton